●羅馬文化史

小林　秀雄著

本書の基礎が著者も序言で言はれる如くB. Niese, Grundriss der römischen Geschichte nebst Quellenkunde であり、且そのE. Hohl の改訂になる第五版であらうことは原書と對照して明である。而して、本書が、尙「モムゼン、ビリー（ベリーのことか）等を參酌された上に出來上つたものと言はれても、先づ大部分はニーゼの書の飜譯に近いものである。隨て飜譯又はそれに近き本書の文章上の批判を、言語學者に委ねるとせば歷史的批判はニーゼ及ホールその人等に向けられねばならないであらう。ニーゼの書はもと〳〵Iwan Müller監輯の Handbuch der klassischen Altertumswissenschaft 叢書の第三卷第五部として、主としてローマの政治的發展を敍述するを目的とし、政治以外の土俗、宗教、文學等の諸文化に就いては夫々該叢書の他の部門に委ねられたのである。隨てニーゼの書は文化史といはんより政治史である。もし本著者がローマ文化史を敍述せんとしてその典據をニーゼの書に求めたりとせば大なる誤ではなかつただらうか。勿論ローマ人の獨創的文化はそれは法律である、ローマの眞に獨創になる文化―此の限りに於いてローマ文化と云ひ得るものは法律に他ならない。故に、此の限られたる意味に於て　ローマ文化史は必然的にローマ政治史なる形態をとらざるを得ぬ、といふ正しい理解の上に本書はなれるものであらうか。著者は序文に於て「元來ローマはギリシヤの如き藝術の國に非ずして、法律の國であるから」ニーゼの書が多少無味乾燥と感ぜられる如き書となつたといふ意味のことを云はれる。こゝに、ローマ文化及びニーゼの書の成立動機に對する著者の理解の深さが窺はれる。とまれ紀元四七六年西ローマ帝國の滅亡迄のローマの政治的發展を概說し、ローマ史に關心を有する者にはよき入門書として現はれた本書がニーゼと共に政治史に偏したるは本書の特質なるも、同時にそれが、ローマ文化史としては缺くる所多きを思ふのである。（蒲判四九六頁、白東社發行、定價五圓）〔井上〕

●田中萃一郎史學論文集

慶應義塾大學教授法學博士田中萃一郎氏逝いて此に十週年、その遺著の一部が表題の如き書名の下に三田史學會から發行された。

名著「東邦近世史」『ドーソン蒙古史』や折々東洋學報などに物される論文によつて、著者を純粹な支那學者とのみ思つてゐた我々は卷頭の著作目錄によつて故人が西洋史學にも深き造詣を持ち古くは希臘の古代より最近の歐米政界の狀況を論じ、更に史學理論にも一家の見識を具へらるゝを知つて今更乍ら驚き入つた次第である。一般に明治時代に學問された先輩は間口も奥行も廣く深く、今日の樣に何處の何時期專攻といふ細かい繃張のなかつたのは我々後輩の敬服にたへぬ所である。

本書收むる所二十五篇、東西古今に亙つてとりどりに有益な文字であるが、中で一二に就て紹介するならば、「支那學の沿革」

は歐洲に於ける支那研究の歴史を述べたもので、博學著者の如くして始めて出來る勞作であらう。歐洲人の支那に關する著述を丹念に列擧してあるので、一面支那外交史、支那近世風俗史に關する要書目錄としても利用出來る。この論文は嘗て東洋學報に連載されたものであるが、此に一箇所に纒めて見得るのは甚だ便利である。最近出版された石田幹之助氏の「歐人の支那研究」と併せ讀む可きものであらう。

「史學の性質及び任務」は史學者の立場から歴史觀を述べたものである。近頃哲學者や社會學者が色々なことを史學に要求するが、或は抽象的な議論に止まり、或は到底出來ないことを注文される。若しそれ何々史觀、歴史哲學の飜譯、飜案に至つては、その日本語からが我々には至極難解であつて、もう一度外國語に譯して貰はぬと理解出來ぬ向も少くない。その點に於て著者の史學觀は地上に足がついてゐるので安心して傾聽されるものであり、且實際史學の研究法に有益な助言を與へられる。博士が主張される所謂實用的な史學に就ては或は異論も出るでもあらうが、その緒論に述べられたことが、近刊三木清氏の「歴史哲學」の最初の一段落と期せずして符節を合する如く一致するのは面白い。そして兩者がこの一點で交つたきりで永遠に背馳して了ふのは我々に何を敎へるか。この外、史學史、史觀に關したものに、「劉知幾の歴史研究法」「王鳴盛の史學」「クロパトキンの史觀」「Emil Reich 氏の史學研究法」「希臘の二大史家」等を收む。何れも學、東西に亘る博學者のみから期待し得る卓說である。

博士の舊著「東邦近世史」は既に絶版となつて、坊間に異常な高價を呼んでゐる。天、博士に壽を假さず、「ドーソン蒙古史」を完成されなかつたのは誠に遺憾であつた。三田史學會に於ては引續き東邦近世史、蒙古史、歐洲最近政治史、政治論文集を刊行される計畫であるといふ。其際にはドーソン蒙古史續卷の原稿の出來た所までを整理追加されんことを希望する。

（三田史學會發行、定價金五圓）〔宮崎〕

●Y. Gordon Childe; *Skara Brae, a Pictish Village in Orkney*, London 1931.

The Aryans, The Dawn of European Civilization, The Danube in Prehistory, 等の著書によつてよく知られてゐるゴルドン・チャイルド教授の新著『スカラ・ブレー』は蘇格蘭の北端、オークニー島の海濱にある小さい村落遺跡の報告である。既に蘇格蘭の考古學會彙報に報告されたものであるが、それがいくらか變更されてこゝに單行本として出版された所以は實にこの遺跡が先史時代の日常生活を示す住居址として數少い遺跡の一であるからである。その年代の如何に拘らず、純然たる石器時代であつて、金屬器或は金屬器使用の痕迹をとゞめる遺物はない。最下層は動物の骨、貝殼、土器片等廢棄物の堆積のみで、建造物の遺址なく、第二層には石板石の家屋があり、第三層は廢棄された第二層の建物を地盤としてより發達した石造家